

J. コルチャック著『もう一度子どもになれば』の 教育学書としての価値の検討

—M.ブーバーによる「包擁 (Umfassung)」を手掛かりに—

小田倉 泉 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

キーワード：J.コルチャック、児童文学、M.ブーバー、「包擁」

1.はじめに

J.コルチャック¹⁾(Janusz Korczak,1878-1942)については、近年、日本においても1989年国連子どもの権利条約成立の思想的背景の一人として認知されつつある。2011年には児童対象の絵本『コルチャック先生 子どもの権利条約の父』²⁾(作：Tomek Bogacki)が、講談社から柳田邦男による翻訳で出版され、その後も複数のコルチャックを紹介した児童書が出版されている³⁾。

コルチャックは生涯に多くの著作を残したが、邦訳されているものとしては、“Król Maciuś Pierwszy (King Matt the First)” (1923)が、『子どものための美しい国』(中村妙子訳、晶文社、1988)、『王様マチウシ I 世』(近藤康子訳、女子パウロ会、1992)、『マチウシ一世王』(大井数雄訳、影書房、2000)として、また“Kiedy znów będę mały (When I am little again)” (1925)が『もう一度子供になれば』⁴⁾(近藤康子訳、図書出版社、1993)として出版されているのみである。その他には、塚本智宏による翻訳で“Prawo dziecka do szacunku (The Child’s Right to Respect)” (1929)が『子どもの権利の尊重』として『季刊教育法』92号(1993年)に、また“Momenty wychowawcze (Educational Moment)” (1924)が、『教育の瞬間』として塚本・鈴木共訳で『名寄市立大学紀要』第2巻(2008)に紹介されている。

本稿で検討する『もう一度子どもになれば』は、邦訳された数少ない作品の一つである。本稿で使用した訳書“When I am little again”⁵⁾は、E.P.Kulawiecによるポーランド語から英語への翻訳で、1992年にアメリカで出版されたものである。Kulawiecは、この作品と併せて『子どもの権利の尊重』、また『ゲッター日記』を翻訳し、アメリカへのコルチャック伝播に貢献した教育学研究者である。先に挙げたように、本作品は1993年に図書出版社より近藤康子氏によって邦訳出版されており、日本におけるコルチャック紹介の先駆的翻訳書とも言える。そこで本稿においても、タイトルは近藤訳のものを使用する。

コルチャックの著作は、大人を対象とした教育書や教育学に関する論文と、子どもを対象とした児童書とに大別される。しかし、児童書とされる作品の多くが、大人をも対象としている点は彼の児童書の特徴である。とりわけ本稿で取上げる『もう一度子どもになれば』は、しばしば児童文学書として分類されるが、教育学書としての価値を検討する必要があると思われる。本稿では、『もう一度子どもになれば』(以下『もう一度…』と記す)の教育学的価値を、M.ブーバーの教育論「包擁 (Umfassung)」⁶⁾を手掛かりとして検討していきたい。

2. 作品の背景

本書は、1925年に発表された作品である。M.Falkowska (1997) は、コルチャックの生涯を7つの期に分け、その内1918年から1931年までを「コルチャックの活動と創造性の最盛期」⁷⁾としている。この期間には、「家庭」、「サマーキャンプ」、「孤児たちの家」、「寄宿学校」の4編から成る代表作『子どもをいかに愛するか』の出版を始めとして、『マチウシ王1世』(1922)、『孤島のマチウシ』(1923)、『子どもの権利の尊重』(1929)など、コルチャックの教育学が文学として著された作品が連続して出版されている。この期間のほぼ中盤にあたる時期に、『もう一度…』は発表されている。『もう一度…』の前に発表された『マチウシ王1世』においてコルチャックは、子どもによって「世界を変える」こと、子どもと大人の相互信頼と協力をテーマとしているが、『もう一度…』においても、同様のテーマが貫かれている⁸⁾。

「活動と創造性の最盛期」が始まる1918年はポーランド独立の年であるが、この頃からコルチャックは、孤児院における活動の他、「国立特殊教育研究所」(1922～)「福祉研究センター」(1929～)「国立教師研究所」(1930～)、地域裁判所の子ども問題担当など、新生ポーランドの教育研究に携わるようになっており、教育者として最も充実した日々を送る中で書かれた作品であると言える。

ところで、19世紀後半から20世紀にかけての児童文学界においては、子どもの日常生活と子どもの内面を描いた作品が盛んに書かれるようになっていく。この動向は「子どもの視点が大人の市場を手に入れた」⁹⁾と評されるほど、一種の流行のように捉えられることもある。しかし、児童文学界において子どもの視点を作品のテーマとする傾向は、同時期の子どもを教育の中心に置く新教育の思潮と決して無縁ではないであろう。それはまさに時代の流れの中で、大人の目が子どもの視点を獲得しようとしていった一つの到達点とも言えるのではないだろうか。このような背景の中に、コルチャックの『もう一度…』は生まれたことを踏まえておきたい。

3. 『もう一度子どもになれば』 概要

本作品は、大人の生活に疲れた教師である「僕」が、子ども時代に思いはせている場面から始まる。ある夜「僕」は、幸せな子ども時代の日々に戻ることを願う。すると「僕」は、「小人の魔法」によって子どもに戻り、子ども時代を再体験することになる。「僕」は、「大人になったことがある」ことを隠し、「今までずっと小さい男の子だったようなふりをして」子どもとしての生活を始める。

子ども時代とはどのような時か、子どもは生きているその世界で何を見、何を感じ、何を考えて生きているのか、大人と子どもの関係とは、子どもと子どもの関係とは何か、それらを、子どもとしての「僕」と、子どもの「僕」の中にある大人の「僕」、しかも教師だった「僕」の目を通して描いている。

4. 作品の特徴と評価

本作品は、子どもの日常の喜びや悲哀といった内面世界を描いた物語であるが、最大の特徴として2つの点を挙げることができる。

1つ目は、子どもとしての主観と、大人としての主観、この2つの主観が共存する主人公「僕」の目を通して、子どもの日常生活における内面世界が描写されている点である。Cohen (1994)¹⁰⁾は、大人としての経験や知識を記憶したまま子どもに戻るといった物語の設定が、二重の目線を作り出し、様々な出来事を子どもの目と大人の目の両方を通して見ることを可能にしていると述べる。更に、この二重の目線によって、教育のプロセスを遠近両方から、また、当事者の内部と外部から描写することができたと評価し、本作品を教育学書と文学的小説の融合であると述べている。

2つ目の特徴は、主人公「僕」が物語の展開の中で、読者に対して「あなた」と語りかける箇所にある。「僕」が語りかける「あなた」は、ある時は「子ども」であり、またある時は「大人」であって、語りかけの対象が物語展開の文脈によって変わる。しかし、それが「大人」であるか「子ども」であるかは明記されていないため、展開の中で判断するしかない。「大人」に対する語りかけの内容は、多分に大人に対する批判であったり、子どもの内面世界への気づきを促すメッセージである。コルチャックは、本作品を大人と子ども双方の読者を対象に書いていることを作品の冒頭に記しているが、作品は単に子どもに戻った主人公の日常や内的世界を描いた物語ではない。コルチャックは、しばしば物語の場面を一旦静止させて、「あなた」への語りかけをする。従って物語の展開は、必ずしも時系列に沿って進むのではなく、出来事に対する読者への語りかけを挟み込みながら進行する。この語りかけが本作品の第2の特徴であり、教育学書としての特性を見出させる要因である。

本作品はしばしばコルチャックの作品の内の児童文学に分類されるため、文学小説と見做されることは否めないが、文学として以上に、教育学書としての特性に注目して本作品を捉える必要がある。そこで本作品の教育学書としての価値を検討していくにあたって、物語全体の特性について、特徴的な箇所を挙げながら述べていきたい。

4-1 「読者へ」

まず作品冒頭の読者へのメッセージが、本作品を理解する上で重要な役割を果たしている。物語の冒頭に添えられた読者へのメッセージは、「大人の読者」と「若い読者」に宛てたもので、これらには、本作品の意図が象徴的に表現されている。大人の読者に対しては、子どもとその内面世界を知ることとそれに対する大人の謙虚さへの要求であって、これは作品全体を通して意図されているテーマである。

【引用1】

大人の読者へ

あなたは言う：

— 子どもを扱うのはめんどうだ。

あなたは正しい。

— 私たちの知性のレベルを子どもに合わせて下げなければいけないのだから。

身体をかがめて、ひざを曲げて、しゃがまなくてはいけない。

— あなたは間違っている。

子どもを扱うことがめんどうなのは、そういう理由からではない。そうではなくて、私たちが子どもたちの感性の高さに届くように手を伸ばさなければならないからだ。手を伸ばし、背を伸ばし、つま先

立ちをして。彼らを傷つけないように。(“When I am little again” p.3)

【引用2】

若い読者へ

この物語にはわくわくするような出来事は出てきません。心理学的なお話しにするつもりだからです。でももちろん、犬を調教するようなたぐいの心理学ではありません。犬についての話ではないけれど、ワテックという犬は登場しますよ。

ギリシャ語の「プシュケー (psyche)」という言葉には、魂という意味があります。ここで私がお話ししようとしていることは、人の魂の中で起こっていることについてなのです。つまり、人が考えたり、感じたりしていることについてなのです。(p.5)

4-2 2つの主観

作品の概要にも記したとおり、本作品は大人の生活に疲れた教師「僕」が、不幸な大人の生活から逃れるために、小人の力を借りて子ども時代に戻る所から始まる。「僕」は心身共に子どもであることを取戻し、子どもの運動能力、子どもの感性をもつことに新鮮な驚きを感じている。この驚きは、大人としての「僕」によるものである。つまり、子どもであることを主観的体験としながら、同時に大人としての「僕」がその変化を客観的に捉えていることを示している。

次の引用は、「第1日目」と題された章の冒頭部分である。子どもに戻った「僕」が、子どもの生活の再体験を楽しむ心境が軽快に描写され、「僕」の中に子どもと大人が併存していることを読者に悟らせる箇所である。

【引用3】

一度大人になったことがあるなんて、誰にも言わなかった。僕は今までずっと小さい男の子だったふりをして、これから何が起るかを見ようとしていた。それはとても奇妙でおかしな感覚だった。僕は周りにあるものすべてを観察しながら、じっと待っていた。

僕はママがパンをスライスしてくれるのを待っている、まるで自分ではできないみたいに。ママは授業はどうだったかと僕に聞く。僕は大丈夫だよ、と答えただけだけど本当のところはわからない。

…… (中略) ……

僕は歩いて、と言うよりは両手をふって行進していった。とても身軽で気楽な気分だった。教師だったときは正反対だ。…… (中略) ……

きっと僕はクラスで一番よくできる生徒だろう。だってもう一度学校を終えたのだから。いくつかは忘れてしまったけれど、何かを思い出すということ、全部をもう一度改めて学び直すということは、全然違うことだ。…… (中略) ……

僕は先生の所へ行って、自分がやったものを見せた。

「はい、良くできているわ。でも見て、一つ間違いがあるわよ。」

「どこですか？」僕は驚いたふりをして尋ねた。

僕はわざとひとつ間違えておいたのだ。そうすれば先生は、僕が一回は学校を終えたということに気付かないだろうと思ったからだ。(pp.15-18)

次に挙げる2箇所の引用は、「僕」が教師に叱責される場面である。【引用4】は、我を忘れて夢中になる子どもの特性から生じた失敗の場面であり、【引用5】は、子どもの深く強い感受性や共感性から生じた失敗の場面である。子どもの動揺、緊張、悲しみや心配等の内面の変化が、子どもの「僕」によって語られていると同時に、いずれの場面においても大人の「僕」が、教師のあり様を自省を込めつつ語っている。

【引用4】

またチャイムが鳴った。

残念! あともうちょっと休み時間がながければなあ、あと数分だけでも。

……(中略)……僕は何も考えずにまっしぐらに走った。……(中略)……そして手すりをつかんで、上へ駆け上がる。周りなんか見ない。でも、僕がみんなをとくに追い越したことはわかる。僕が勝った……僕が一番だ……僕が一番速いんだ。それから僕は全力で狭い廊下を駆けて行った……ドシン! 校長先生に真正面からぶつかった。あんまりひどくぶつかったので、校長先生は倒れてしまうところだった。

本当に校長先生が見えたのだけれど、間に合わなかったのだ。辻馬車の御者やトラックのドライバーみたいに。この時僕は悟った、なぜ子どもたちが不当に非難されてしまうことがあるのかということ。事故は起こる、災難も。でもその子のせいではない。……(中略)……僕は「ごめんなさい」とも言えなかった。でも校長先生は僕の襟首をつかんで、頭が外れてしまうかと思うほど揺さぶった。校長先生があんまり怒っているので、僕は何も説明できなかった。

「名前は何だ? このいたずら坊主」

僕は怖くて、心臓はドキドキして、校長先生の言っていることが一言もわからなかった。

……(中略)……

校長先生はもう一度僕を強く引っ張ってどなった。

「私に言うつもりはあるのか? 聞いているんだ、名前は何だ?」

そしてこの時、子どもが大勢僕たちのまわりに集まってきて、見物し始めた。僕はみんなに見られて恥ずかしくなった。……(中略)……僕は泣き始めた。涙がえんどう豆みたいに僕の頬にぼろぼろと流れてきて、すぐに鼻が詰まってしまった。校長先生は僕の顔を見て、気の毒に思ったようだった。

「教室に戻りなさい。授業が始まっているから。」

僕はちょっと頭を下げて教室に向かって歩き始めた。するとみんながまた僕の方をじろじろ見た。先生もそうやって僕を見ていた。マリルスキが僕の背中をそっと突ついた「どうしたの?」。僕が答えなかったからマリルスキはまた聞いてきた、「校長先生は何て言ったんだい?」……(中略)……考えることがたくさんあった。ちょうど算数の時間だった。みんな黒板の方に集まって、書いたり消したりしていた。先生がチョークを手にとると何か言ったり、何かを説明したりしていた。僕は、耳が聞こえない人よりもっと悪かった。どうしてかということ、僕は聞いていなかったし、見てもいなかったから。……(中略)……

僕が教師だったとき、僕はいったいどう振る舞っていたらう? 色々と違った行動をしていたことだろう。……(中略)……

もし僕がもう一度先生に戻ったとしたら、心配事のある子どもを悩ますようなことは絶対にしないでおう。その子が一人で良く考えられるようにそっとしておいてあげて、落ち着いて休息がとれるようにしてあげよう。(pp.20-24)

【引用5】

〔経緯：学校へ行く途中、怪我をした子犬を拾った「僕」は、子犬をワテックと名付け、用務員室に隠してもらい、教室に戻るが、ワテックのことが気がかりでならない。〕

僕は席に座って考えていた。僕は一晩中温かいベッドで眠っていたけれど、あの犬は一晩中寒い外にいたってことを全然知らなかった。もし知っていたとしても、僕はなにもしてあげられなかった。

……（中略）……

すると先生が言った。「続きを読みなさい」

僕に言っているみたいだ。でも僕は本も開いていなかったから、何が起きているのか分からなかった。僕は馬鹿みたいに立って、ぼかんとして先生を見ていた。ワテックがかawaiiそう、そして僕もかawaiiそう。その時ヴィスニエフスキが言った。「“三部作”^(注)は空想に耽っていました。」両目に涙があふれてきて、僕は急いで頭を下げた、誰にも見られなくなかったから。先生は怒っていなかったけれど、ただこう言った。

「あなたは教科書も開いていなかったのね。あなたをドアの外に立たせなくてははいけないわ。」

先生は、「放り出す」とは言わないで「立たせる」と行った。先生は僕を外へは出さないで、ただ「机のわきに立っていなさい」とだけ言った。

教室の隅でもなくて。

先生は何かが起こっていたということを考えてみなくてははいけなかった。もし僕が先生で、生徒が教科書を開きもせずに座っていたとしたら、何か困ったことがあったのか、どうしたのかとその子に聞くと思うから。

でも、もし先生がどうして僕が集中していなかったのかを聞いたとしたら、僕は先生に言っただろうか？ もちろん何も言わない。……

僕は心配でたまらない。ワテックはお腹を空かせている。だから吠えたりクンクン鳴いたりして、用務員さんに放り出されてしまうかもしれない。……（中略）……

でも僕は授業中だっということを思い出した。もう一回机のわきに立たされているのだから、授業に集中してなくちゃいけない。

僕が大人だったとき、注意深い生徒でいること、授業を良く聞いていること、そして良い成績を取ることは簡単なことだと思っていた。今僕はそれがどんなに難しいことかわかった。僕が先生だったときに、心配事はあったし、授業中に気を散らしてしまうこともあった。でも、誰も僕を隅に立たせたりはしなかった。(pp.93-94)

（(注):「僕」が図画の時間に3つの場面構成の「3部作」を描いたことから、いじめっ子のヴィスニエフスキが「僕」につけたあだ名）

2つの主観を通して描かれる子どもの内面世界の描写は、作品を特徴づけるものであると同時に、子どもと大人の主観の行き来が、より一層大人の読者に子どもの内面世界に対する共感を呼び起こす効果をもつ。V.P.Parsegian (1992) が述べるように、本作品は「大人が子どもの世界に入るチャンスを与える」¹¹⁾ものであり、このような作品によってのみ、大人は子どもの世界に入ることができる。そして読者の子どもの内面世界への入り込みが深ければ深い程、子どもから見た

大人の在りようもまた具体性を帯びて読者につき付けられる。本作品の子どもの内面世界の描写は、子どもの世界への理解に留まらず、子どもの目を通して大人の在りようへの洞察を促す。

このような2つの主観によって描かれる本作品を教育学書として解釈する上で、ブーバーが『教育論』で述べる「包擁」の思想は、解釈の手がかりを与えるものである。これについては、次章において検討していく。

4-3 「あなた」(大人)への語り

本作品の第2の特徴として挙げた、物語展開の中で「あなた」に対する語りの内、「あなた」(大人)に対する語りは、大人と子どもの関係についてのコルチャックの洞察が表現されたものである。

物語は、子どもになった「僕」の日常生活の描写を軸に展開するが、「僕」の内言のような語り がしばしば、特に大人との間に誤解や不和が生じる場面に現れる。それらの多くは「大人」である「あなた」に向けて語られており、その内容は大人と子どもとの関係の在り方への問いかけであったり、時には哀願のような訴えであったりする。【引用6】【引用7】は、その一部分である。これらは、言葉にならない子どもの内面の悲哀やもどかしさや怒りが言語化されたものであり、子どもの「僕」の中に大人の「僕」が存在することによってそれが可能となったことを感じさせる。このような物語の各所に挿入される「あなた」(大人)に対する「僕」(子ども)の問いかけや訴えによって、この作品の読者は教育学的問いへと引き込まれる。

また、大人への問いは、同時に「僕」に「もう一度大人になれば」教師としてどう生きるかという自問を生じさせる。【引用8】は、「もう一度大人になれば」について書かれた部分である。「もう一度子どもになれば」という本作品のタイトルと対照をなす「もう一度大人になれば」という自問は、「もう一度子どもになった」ことの最大の意味を表すものである。教師の目をもって子どもの側において体感されている事柄を知ることが、教師にとって重要な意味を成すからである。これについても、次章でブーバーによる「包擁」と共に検討していきたい。

【引用6】

僕たちは気づいている、僕たちはたくさん見てたくさん知っているし、もっとたくさん感じていて、もっと考えている。ただ僕たちはそうではないふりをしなくてはいけないということだ、大人たちが僕たちの口を塞いでしまっているから。……(中略)……40人も子どもたちがそこにいるのに、教師たちは子どもの目が見えていないとでも思っているのだろうか。なぜ教師たちは校長先生が来た時と同じように振る舞えないんだろう?……(中略)……

教師たちは、口では道徳を語るけれど、一方では僕たちにウソや卑屈さを教えている。それで僕たちは大きくなると弱い者を押しのけたり、強い者の前でペコペコへつらうようになる。

腕の下に包みを抱えながら、大人の僕の心は子どもの苦しみや怒りで絡まり合っていた。(pp.80-81)

【引用7】

僕たちが話すことは不十分でぶきっちょなのだ(少なくともあなたにはそう見えるのだろう、文法がなっていないのだから)。あなたの目には、僕たちはちょっとしか考えていなくて、大して感じていないように見えるからだ。

……(中略)……

あなたは僕たちのやり方を分かっていないし、僕たちの問題について何の洞察力もない。

僕たちはとても複雑な存在だ。無口で疑い深く、控えめだ。もしあなたが僕たちを信頼して僕たち

に思いやりをもってくれないなら、あなたの水晶玉はあなたに何も教えてくれないだろう。(pp.82-83)

【引用8】

もし僕がもう一度先生になったら、生徒たちと理解し合えるように努力しよう。そうすれば、クラス
のこちら側と、先生のおかかえのあちら側、というように2つの対立するグループがいるという感じは
しなくなるだろう。誠実になるように努力しよう。……(中略)……

子どもになりたいと思ってはいたけれど、今はもう一度大人になれたら何をしようか考えている。
(pp.66-67)

4-4 物語の結末

物語は、子どもと大人との関係だけでなく、子どもと子どもの関係についても、子どもの内面の
揺れ動きや、それに伴う外的な変化についてもリアルに描いている。とりわけ、ムンデクという名
の親友との交流には、純真で健気な子どもらしさを象徴する子ども像が描かれている。しかし、
物語は、「灰色の日々」と題された章で終わる。

「僕」は、子どもの日々を送るにつれ、子どもの世界の心配や悲しみを知り、それらが大人のも
のより、より一層痛むものだと知る。更に子どもの日々が長くなるにつれ、「僕」は大人であった
時の経験や知識が徐々に薄れて行ってしまい、物事がうまくいかなくなっていることを感じる。そ
のような中でトラブルが起き、激しい怒りや悲しみの中で、「僕」は「もう一度大人になりたい」
と願う。

本作品は、彩りも鮮やかで活気に満ちた子ども時代というイメージに始まっているが、「灰色
の」子ども時代からの逃避という形で終わる。子ども時代の悲しみや痛みを強調し、その暗さを
突き付ける結末には、読者の感情に深い印象を残すためという文学としての手法もあると考えられ
るが、教育書として、子どもの世界とは決して明るく幸福に満ちたものではないということを大人
の読者につきつける意図がある。しかし、1929年の作品『子どもの権利の尊重』において彼は子
ども時代を「純白で透明で、無垢な」ものと書いている。コルチャックにとって、子ども時代とは
本来灰色なものではないが、「純白で透明で、無垢な」な子ども時代が「灰色の日々」にもなり得
ること、またその要因は子ども一大人、子ども一子ども、の関係性において生じてくるものである
ことを強調して本作品を終わらせる必要があったのである。

5. 『もう一度子どもになれたら』における「包擁 (Umfassung)」の検討

5-1 教育関係における「包擁」

本作品のような子どもの内面描写に長けた文学作品は、子ども理解の一助としての力を有し、
教育のプロセスにおける子どもと大人との関係を再考することを促すものとして有用であると言え
る。しかし、M. ブーバー (Martin Buber, 1878-1965) の包擁の概念をもって本作品を捉えると、
決して子ども理解の為の教育学書では留まらないことが明らかとなる。

Kurzweil (1968) は、この作品をブーバーの「包擁」を平易に例示したものであると述べ、こ
の「包擁」が、教師がもう一度子どもになるという本作品の目的であると述べる¹²⁾。Cohenもまた、
Kurzweilが「包擁」の思想が実践的に理解されたものとして本作品を評していることに対し、「恐

らく妥当なものであろう」とし同意している¹³⁾。Kurzweil、Cohen共に本作品がブーバーの「包擁」の思想を表すものであるとするが、ブーバーの言葉そのものに照らした検討は行っていない。そこで、本作品の教育学的価値を「包擁」を手掛かりに検討したい。

ブーバーが『教育論』(1953)で述べる「包擁」とは、「二人格間の関係」において「両者によって共通に」体験されている出来事を、「自己自身が行為しているという実感を何一つ損ねることなしに、同時に他者の側から体験することである¹⁴⁾。田端(2014)の言葉を借りるならば、「包擁」とは「一つの共同の出来事ないし状況を、私が、この状況の両極を包括的に把握しつつ、この両極的な状況を、自分の極からだけでなく、相手の極へと反転して相手の極からも、感受する¹⁵⁾」ことである。相手の側からも共通の出来事を理解する、ということについてブーバーは、「包擁」とは「感情移入」とは正反対のものであることを強調する。というのは、「感情移入」とは、ある対象の中へ自分自身をすべり込ませ、その中へと自分を『移し替える』ことを意味するのであって、それは、その状況から自分自身を排除することであり、自己を排除してしまうと、合い向かい合う「二人格間の関係」において成り立っていたはずの状況を消滅させてしまうこととなるからであるという¹⁶⁾。これに対し「包擁」とは、共同の状況を体験している自己自身を保ちつつ、自己を拡大させて他者の側からも体験するものであるため、その状況が消滅させられることはない。

では、この「包擁」が教師と子どもの教育関係においてはどのようなものとなるのか。ブーバーによると、教育とは、教師と子どもが『教育し』『教育される』という共通の状況のそれぞれ他方の極に立っている状況である。この状況における「包擁」をブーバーは次のように言う。

「教師は随時にこの両極的状況を、たんに自分自身の極からのみではなく、彼に向かい合っている相手の極からもまた、つまり、その全要素にわたって体感しなければならない。」¹⁷⁾
(『我と汝』)

教師は、教育する自分の側だけでなく、教育される子どもが教師の行為をどう感じているかを、子どもの側から体感しなければならない。その際教師は、教える側としての自分の実感を失うことなく保つingことが必要である。つまり、自分と子どもの両方の側から同時に、教師としての自分の行為を体感することを意味する。

ブーバーが、教育関係における「包擁」を提唱したのは、旧教育も新教育をも超える「第3の教育の原理を提示するため」¹⁸⁾であった。というのは、ブーバーによると、旧教育には子どもを支配しようとする「権力意志」があり、新教育には「自己満足に陥る感情である」¹⁹⁾「エロス」があるが、それらは「まさしく教育のとらざるところ」²⁰⁾であるためである。関川(1994)の解釈によると、「権力意志」や「エロス」は教育者が抱きやすい衝動であり、教育者の衝動がこれらによって規定され、凝り固められてしまうと、その主観性は突き破られず、他者との相互性は生まれてこない。しかし、向かい合う相手の極から体験をするなら、「権力意志やエロスを否定し、その主観性を止揚したことになる」という²¹⁾。つまり、教育者が人間としての自己の欲を乗り越えているということが、「包擁」の条件として求められるのである。それ故ブーバーは、教育とは「高度の禁欲」²²⁾を意味すると述べているのである。

では『もう一度…』に見られる描写を、「包擁」の概念からどのように捉えることができるだろうか。当然のことながら、文学においては、二人格間の関係という現実は起こりえない。相対する二者の関係が「対話的關係」として現前しなければ、「包擁」はあり得ず、作品の中での一人の人格の二重性の中では、「包擁」はあり得ない。しかし、教師にとって、子どもの極に立ち、そこ

から自分の極を見ることは容易ではない。そこで、たとえフィクションの場においてであれ、教師の主観を残しつつ子どもの極に立つ、つまり一つの状況を両極から体感することを疑似体験することは、意味のあることであろう。

コルチャックは、子どもとしての「僕」が語り進める物語に、常に大人の「僕」もいるという設定とすることによって、子どもと大人の両極からの目線を物語の中に常に存在させている。大人としての「僕」は、子どもの「僕」の中に秘かに存在するため、個人的な衝動や欲からは自由である。本作品の特徴である2つの目線は、大人と子どもの2つの極、とりわけ子どもの極において何が体感されているのかを、大人の読者に擬似的に体感させるものと言える。

5-2 教師が「包擁」することの重要性

しかし教育関係における「包擁」において重要なことは、子どもの極から自己の行為を見ることによって、子どもの極において体感されている自己の行為がどのようなものであるかを知ることである。「包擁」の最も重要な意味をブーバーは次のように述べる。

「教育者は〈中略〉まさしく歩み寄ってくる者（かくてまさしく教育者の立場から見ると歩み寄ってくる者）の受容と拒否を『向こう側』から感じ取ります。〈中略〉そこから魂が現に何を必要とし何を必要としないかが露わになるはずであります。〈中略〉この人間がこの瞬間に何を必要とし何を必要としないかを教育者が再三再四気づくことによって、人間というものは成長するためにいったい何を必要とするのかの知識に、しかしまた、『教育者』として彼は必要物のうちで何を与えることができ、何を与えることができないか—すでに何を与え、まだ何を与えていないかの知識に、彼ははいよいよ深く導かれるのであります。」²³⁾ (『教育論』)

田端が述べるように、教師が「包擁」することの重要性は、教師の子どもの内面理解ではなく、子どもへの教師自身の行為の是非を教師自身が問い、教育者として何を成すべきかを問い続けることにある²⁴⁾。齋藤（1993）もまた、「自己と対向している存在によって自己の存在を確認し、行動の指針とするために〈包擁〉がある」²⁵⁾と述べる。

物語の中で、子どもの「僕」が大人との関係の中で何らかの出来事に遭遇すると、大人の「僕」は、子どもの「僕」の痛みや悲しみを同時に体感することで、痛みや悲しみの原因となった大人の行為と大人であった時の自分とを重ねあわせる。そして、教師としての自己の行為について自問し、「もう一度先生になったら」どう行動すべきかを考える。このような「僕」の思考プロセスは、子どもの目線から得た子ども理解に留まらず、自分の行為の是非を問い、改善を図ろうとするものであって、ブーバーが「包擁」において目指した教育者の「自己陶冶」²⁶⁾に等しいものであると言えるだろう。

『もう一度…』が、子どもの内面世界を明らかにしていくことを目的に書かれたのであれば、子どもの目線のみを通して描くことだけで充分であったであろう。しかし、本作品が大人の読者に対して書かれた意図は、まさに子どもの目を通して大人を見、それによって大人自身のあり方の是非を問うことであった。この目的において、コルチャックが子どもの体験を感じ取ることで自らを振り返る大人の目線を主人公の中に置いたことは、本作品が教育的な深い洞察に基づいて書かれたことを示していると言える。

6. 結語

コルチャックは、1925年発表の作品『もう一度子どもになれば』において、ブーバーが『教育論』(1953)において著した「包擁」の概念に極めて近い表現をもって教育論を展開した。『もう一度…』は、児童文学として書かれた作品でもあるが、本稿において検討してきたように、教育学書として見做すことの方が妥当であろう。しかも、単に子ども理解を促すようなものではなく、作品を通して教師が自分自身について再考することを促すことを目的とした教師のための教育学書とすることができる。ここにおいて、教育のプロセスにおける子ども理解の意味を改めて問うことを促される。

幼児教育・保育においてしばしば幼児理解の重要性が説かれる。保育の基本が幼児理解にあり、幼児理解を通して保育者は自身の保育の是非を問うことは周知のことである。しかし、真の幼児理解とは何であろうか。ブーバーの「包擁」の概念によれば、子どもに対する「権力意志」や「自己満足」の衝動なしに、自分を保ちつつ、自己の保育を子どもの側から体感する、すなわち「包擁」することが無ければ、真の幼児理解は無いであろう。更にそこから、子どもが「何を必要とし何を必要としないか」、保育者は子どもに「何を与えることができ、何を与えることができないか」を問い続け、自らの保育行為を検討し続けることによって、保育の質を高めていくことができるのである。コルチャックの『もう一度…』の主人公は児童期の子どもではあるが、本作品は、あらゆる子ども期にある子どもとの関わりをもつ教師に対して、子どもの極からの鋭い視線を伝え、教師自身が行為を再考することを促し且つ励ますのである。

コルチャックの作家としての作品はフィクションではあるが、日々の教育実践の経験から生み出されたものであることによって、他の作家による作品と区別される。コルチャックの数々の児童文学作品に含まれた教育学書としての意味の検討を進めていくことが、今後の課題である。

注

- 1) 本名Henryk Goldszmit。教育者、小児科医、作家。1912年よりワルシャワの2つの孤児院の院長を務め、第二次世界大戦下、ユダヤ人孤児、教職員と共にワルシャワ・ゲットーからトレブリンカ絶滅収容所に送られる。
- 2) 原題：“The Champion of Children: The Story of Janusz Korczak”
- 3) 2012年にはコルチャック没後70年記念として『ブルムカの日記—コルチャック先生と12人の子どもたち』(作：イヴォナ・フミエレフスカ、訳：田村和子・松方路子、石風社)が出版された。2015年9月には「ぼくたちに翼があったころ コルチャック先生と107人の子どもたち」(タミ・シエム＝トヴ著、樋口範子訳、福音館書店)が、2015年10月には「コルチャック先生—子どもの権利を求めて」(フィリップ・メリュ著、高野優・坂田雪子・村田聖子訳、汐文社)が出版されている。
- 4) ヤヌシュ・コルチャック著、近藤康子訳(1993)『もう一度子供になれば』, 図書出版社。(“When I am little again”の和訳にあたって本書を参照させて頂いた)
- 5) Janusz Korczak, (1925) *Kiedy znów będę mały*, Warsaw. (=1992, E.P.Kulawiec, trans., *When I am little again/The Child's Right To Respect*, Lanham, Maryland, University Press of America.)
- 6) “Umfassung”は「包擁」「包合」「包容」など幾つかの訳語があるが、『ブーバー著作集』(みすず書房)において使用され、また多くのブーバー研究者によって使用されている「包擁」を用いた。
- 7) Maria Falkowska (1997) “Calendar of Life and Work of Janusz Korczak”, *Dialogue and*

Universalism, No.9-10, Warsaw University, Warsaw, pp.181-188.

- 8) E. P.Kulawiec (1992) "Introduction", *When I am little again/ The Child's Right To Respect*, translated from the Polish with introduction by E.P.Kulawiec University Press of America, pp. ix-xvii.
- 9) ジョーン・エイキン著、猪熊葉子訳 (1986) 『子どもの本の書きかた』 晶文社、p.13.
- 10) Adir.Cohen, (1994) *The Gate of Light Janusz Korczak the Educator, and Writer Who Overcome the Holocaust*, Associated University Presses, p.192.
- 11) V.P.Parsegian (1992) "Foreword", *When I am little again/ The Child's Right To Respect*, translated from the Polish with introduction by E.P. Kulawiec University Press of America, p.XX.
- 12) Zvi E.Kurzweil (1968) "Korczak's Educational Writings and the Image of the Child" *Jewish Education*, Vol.38, pp.19-28.
- 13) Cohen, op.cit., p.192.
- 14) マルティン・ブーバー著、山本誠作訳 (1970) 「教育論」『ブーバー著作集8 教育論・政治論』みすず書房、p.29.
- 15) 田端健人 (2014) 「教育関係における他者の受容：マルティン・ブーバーによるカール・ロジャース批判から」『宮城教育大学紀要』49巻、p.239.
- 16) ブーバー、前掲「教育論」、p.29.
- 17) マルティン・ブーバー著、田口義弘訳 (1978) 『我と汝』みすず書房、pp.172-173.
- 18) 齋藤昭 (1993) 『ブーバー教育思想の研究』風間書房、p.409.
- 19) 同上.
- 20) ブーバー、前掲「教育論」、p.24.
- 21) 関川悦雄 (1994) 「教育的関係：ブーバーの「包擁」の概念を中心に」『教育學雑誌』28巻、pp.43-59.
- 22) ブーバー、前掲「教育論」、p.25.
- 23) ブーバー、前掲「教育論」、p.36.
- 24) 田端、前掲論文.
- 25) 齋藤、前掲書、p.419.
- 26) ブーバー、前掲「教育論」、p.36.

引用文献

Janusz Korczak, (1925) *Kiedy znów będę mały*, Warsaw. (=1992, E.P.Kulawiec, trans., *When I am little again/The Child's Right To Respect*, Lanham, Maryland, University Press of America.)

Adir Cohen, (1994) *The Gate of Light Janusz Korczak the Educator, and Writer Who Overcome the Holocaust*, Associated University Presses.

Maria Falkowska (1997) "Calendar of Life and Work of Janusz Korczak" *Dialogue and Universalism*, No.9-10, Warsaw University, Warsaw, pp.181-188.

E.P.Kulawiec (1992) "Introduction", *When I am little again/ The Child's Right To Respect*, translated from the Polish with introduction by E.P.Kulawiec University Press of America, pp.ix-xvii.

Zvi E.Kurzweil (1968) "Korczak's Educational Writings and the Image of the Child" *Jewish Education*, Vol.38, pp.19-28.

V.P.Parsegian (1992) Foreword, *When I am little again/ The Child's Right To Respect*, translated

- from the Polish with introduction by E.P.Kulawiec University Press of America, pp.xx-xxi.
- ジョン・エイキン著、猪熊葉子訳（1986）『子どもの本の書きかた』晶文社。
- マルティン・ブーバー著、山本誠作訳（1970）『ブーバー著作集8 教育論・政治論』みすず書房。
- マルティン・ブーバー著、田口義弘訳（1978）『我と汝』みすず書房。
- 齋藤昭（1993）『ブーバー教育思想の研究』風間書房。
- 田端健人（2014）「教育関係における他者の受容：マルティン・ブーバーによるカール・ロジャース批判から一」『宮城教育大学紀要』49巻、pp.237-246。
- 関川悦雄（1994）「教育的関係：ブーバーの「包擁」の概念を中心に」『教育學雑誌』28巻、pp.43-59。

(2016年3月31日提出)

(2016年5月10日受理)

Examining educational value of “When I am little again” written by J.Korczak as a pedagogical writing

: Using M.Buber’s idea of “Embracing (Umfassung)” as a guide

ODAKURA, Izumi

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Recently, J.Korczak is being recognized as one of the persons who are in the ideological background of the establishment of the Convention on the Rights of the Child, in Japan. Korczak wrote a lot of work as a writer and as an educator. Among his works written for children, there are educational values for adults and teachers. The aim of this paper is to consider the pedagogical value of Korczak’s writing “When I am little again” by using the idea of M.Buber’s “Umfassung (Embracing)” as a key concept. In this work, Korczak tells the story of one teacher who returns to the childhood again and who has not forgotten his life experience as an adult. Korczak presents the world of children through the eyes of a child and through the eyes of adult. In this work there are two features. The first one is that the hero has a double perspective: the eyes of a child and an adult. Second is, in the story sometimes the hero temporarily suspend the story and speaks to the audience (the reader) “you”. This “you” is sometimes a child and sometimes adult. This narrative includes a pedagogical meanings, it is one of the factors that this writings is regarded as pedagogical book. The “Umfassung” is that in the relation of two personalities (teacher and pupil), ‘this one person (teacher), without forfeiting anything of the felt reality of his activity, at the same time lives through the common event from the standpoint of the other’(M.Buber). And the most important thing in “Umfassung” is not to understand children, but to question the teacher’s own act and to continue to question what she/he should do as a teacher. In Korczak’s story, when his hero encounters an event as a child, he reflects on his behavior as an adult. Therefore this book provides the simulated experience of “Umfassung” for readers and encourages teacher to have a rethink about his/her act to children.

Keywords: J.Korczak, juvenile literature, M.Buber, “Embracing (Umfassung)”